



Title	20世紀におけるペルシア伝統芸術音楽の伝承
Author(s)	阪田, 順子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43328
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 さか 田 順 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 6 5 0 5 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 13 年 9 月 21 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科文化表現論専攻

学 位 論 文 名 20世紀におけるペルシア伝統芸術音楽の伝承

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 山 口 修

(副査)

教 授 根 岸 一 美 教 授 林 正 則 助 教 授 加 藤 浩

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ペルシア伝統芸術音楽（以下、ペルシア音楽と略称）が20世紀にたどった近代化の過程を独自の文献研究、フィールドワーク、総合分析等の手法により提示する研究である。本来、そしていまなお、音楽知の主要部分をいわゆる口頭伝承にゆだねているペルシア音楽の世界は、その全貌や一端がわかりやすく提示されてきたとはいえなかった状況に照らし合わせて、そうした問題を解決するための一例として本論文を位置づけることができる。

論文は、全二部四章で構成され、基礎的な知識のための概説から未来への展望にいたるまでの論を展開する筋道をたてている。第一部「ペルシア伝統芸術音楽の基礎概念」は論文の主要部分としての第二部「20世紀におけるペルシア伝統芸術音楽の伝承」を展開するために必要な導入部であり、第一部そのものと同一の題目による一章のみで構成され、全6節からなる。すなわち、国名表記の問題や地理的・民族的・言語的・宗教的・政治的・社会的背景を整理した「定義」、次に「分類」、音楽の内的構造として重要な旋律構造と時間構造を整理した「基本的特性」、さらに「演奏の実際」、そして「スーフィズム〔神秘思想〕と伝統音楽」「ペルシア音楽史概要」である。

論文全体と同一の題目による第二部では、まず19世紀末カジャール朝末期の音楽状況を確認し、ミルザー・アブドラーを出発点とする現在までの伝承の経緯をたどる第二章「20世紀におけるペルシア音楽伝承の始まり」から論を説き起こす。第三章「ペルシア音楽における近代化と『センター』」では、20世紀初頭のふたつの流れを整理したうえで、イラン・イスラーム革命前後の「イラン音楽保存普及センター」（1968年創設、以下「センター」）の活動、さらに現代のポピュラー音楽をも視野に入れて伝承や文化変容の問題を順次論じている。具体的には、近代音楽の父アーリーナギー・ヴァジーリーを頂点とする近代化・西洋化の動きを、旋律素型グーシェの集大成としてのラディーフがいかに伝承されてきたか、五線譜の導入、24等分音律論、主要な弦楽器タールの教則本の刊行、タールの「改良」といった観点からまとめ、それを受け継ぐルーホッラー・ハーレギーによる「国楽」の概念にいたる流れを考察している。さらに、いまや正当な伝承の核となっているセンターの発足事情、設立理念、活動や伝承の系譜を丹念に追うことにより、現状把握の一助としている。終章「結論」では、口頭伝承から文化の本質を読み取る問題意識をあらためて論じたうえで、1997年以来イランの希望の星となったハタミ大統領の政権下における音楽文化の回復と復活の様相にも触れながら、21世紀への明るい展望を述べている。

(分量 本編 本文109頁 400字換算 約314枚 目次・凡例等15頁、別冊 調査データ・用語解説・文献等90頁)

論文審査の結果の要旨

音楽学が地球全体を包括するかたちで展開しつつある20世紀後半から現在にいたる状況にあって、19世紀以前の伝統よりもむしろ20世紀史を振り返る試みが目立ってきている。その意味で、その潮流にのり、そこに貢献し得る内容の論文がここに完成したことは喜ばしい。しかも、いまや常識となった感のある文献研究と口頭伝承に関するフィールドワークの手法をまじえて、歴史を語ると同時に、文化の本質にせまるかたちで論文を組み立てたことが、曖昧であった対象を明らかにすることに役立っている。

本論文の欠陥をあげるとすれば、ペルシア音楽の基礎的把握が従来のパターンを踏襲しているにすぎず、その響きのイメージが行間から伝わってきているとはいいいがたい点を第一に指摘できる。第二に、スーフィズムや文学といった関連領域についての考察が不十分にしかなされていないのが残念であるが、この問題については、学位取得後の課題とすればよい。ペルシア音楽というきわめて把握の困難な対象をいくつかの論点にしぼって論じた本論文は、従来の水準をはるかに超えるものである。よって、本研究科は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。